

二〇一一年度 将来展望講座（第一回）

「塾高での学び―社会での仕事」

「^{すご}凄い時代」を生きる塾高生たちへ

好奇心忘れずに アンテナを高く！

毎日新聞社 主筆 岸井成格氏

■講演者プロフィール

岸井 成格 (きしい しげただ)

毎日新聞社 主筆

一九四四年九月二十二日生まれ

(66歳)

略歴

一九六三年 慶應義塾高等学校卒業

一九六七年 慶應義塾大学法学部卒業

毎日新聞社入社、熊本支局

一九七〇年 東京本社 政治部

一九八一年 ワシントン特派員

一九八五年 東京本社 政治部副部長

一九九一年 論説委員

一九九三年 社長室委員

一九九四年 政治部長

一九九六年 編集局次長

一九九八年 論説委員長

二〇〇四年 編集局特別編集委員

二〇一〇年六月 毎日新聞社・主筆

著書

『政変』『政治家とカネ』『財界と政界』『昭和の妖怪』『永田町の通信簿』『大転換・瓦解へのシナリオ』『政治原論』

テレビ

サンデーモーニング (TBS)

政策討論 われらの時代 (BS・TBS)



はじめに

大谷（校長） 皆さん、こんにちは。将来展望講座第一回目、岸井さんをトップバッターとしてお迎えします。

岸井さんはジャーナリストで、毎日新聞の主筆をされています。主筆というのは新聞記者のトップとして、新聞の方針を決める記事、論説を書く立場にあります。非常に重要で影響力の大きいポジションです。

さて、この講座は皆さんが将来つくであろう職について考えてもらうために開きました。

岸井さんもこの塾高の卒業生です。当時、おそらく皆さんと同じように、「将来、どうしようか」と考えたと思います。ここに集まっている諸君は、十五歳〜十八歳。十年後はたいいの人はきちんと職業に就いているはずですよ。何をやって食べていくのか。これはたいへん重要なことです。

また、皆さんの最大の関心事は、これから大学に進んで、どの学部に行ったらいいのか。それはどういう意味を持つのか。岸井さんはどう考えたのか。それを経て、どうしてジャーナリストになったのか。

そして、職業と自分の成長、将来の日本はどうなっていくのか。いろいろな思い、質問が出てくると思います。

これから四十〜五十分、お話をさせていただいて、その後、皆さんに質問していただきます。ですから、話を聞くときに、質問することを考えて聞いてみてください。それでは、よろしくお願ひします。



塾高時代の私―好奇心を持つこと

岸井 どうも皆様、こんにちは。ご紹介いただきました毎日新聞社主筆の岸井です。

どれだけ参考になるかわかりませんが、こういう講座は本当にすばらしいのではないかと思います。いろいろな経験を持った先輩が、それぞれ塾高時代、大学時代、いろいろなことを悩んだと思うのです。そういうなかでどういう道を選択して、今日こうなっているのか、という話を聞くだけでも参考になるのではないかと思います。

私が塾高生だったのは、もう五十年前ですから、半世紀前です。私は相撲部でした。それから、ESSにいて英語を一生懸命勉強しようということもありました。そういう関係で、二年のときに、朝日イブニングニュース主催の関東高校生英語弁論大会に優勝してしまいました。自分がいちばんびっくりしたのですが、友人に胴上げをされて、わざとは思いませんが、落とされて痛い目に遭いました。今でも痛みを覚えているくらいです。その後、初めて全校生徒が投票で決めるといって生徒会長に、相撲部推薦で立候補し、当選をしたというのが塾高時代の私

です。

私が生徒会長になって最初に主催したのが講演会です。歴代の塾長先生の連続講演会、その第一回目に小泉信三先生をお招きしてお話を聞きました。当時、小泉先生はお年で、有名な方ではありませんでしたが、福澤先生を直接知っているという、数少ないたいへんな先生でもあったのです。

ですから、生徒会長として最初に何をしようかといろいろ考えたなかで、慶應のこと、そして、福澤先生のこともいろいろ勉強させてもらうための何か催し物はできないか。その結論が講演会で、第一回に小泉先生に来ていただいたのです。

皆さんには今、想像がつかないかもしれませんが、当時、小泉先生は今の天皇陛下がまだ皇太子のころの教育係、そして、今の美智子皇后とご結婚された後は皇太子殿下と妃殿下、今の天皇皇后両陛下、美智子様のご教育係もされたのです。それはいろいろな意味があります。

日本は戦争に負けました。日本がアメリカ・ハワイの真珠湾を攻撃して、日米開戦になったという記念日が昨日、十二月八日です。

週明けの十二、十三日、野田総理は中国を訪問するはずでした。それが一昨日、突然中止、延期になっ

てしまいました。まだ理由はわかりませんが、一つは中国側のインターネットの中で、ちょうどその日は南京の日本人が中国人を大量虐殺したとされた日で、「総理が来るのなら、南京へ行って正式に謝罪せよ。そうでない限りは絶対許さん。抗議行動を起こす」というのがずっと流れたわけです。おそらくそれも中止になった一つの理由ではないでしょうか。南京虐殺の有無については日中間で長年の論争になっています。

つまり、わずか七十年前のことですが、アメリカ、中国との戦争があつて、戦争に負け、戦後、新しい民主主義、自由主義の国として、日本が再出発したわけです。ということは、当然、天皇という地位が変わったわけです。それまでは絶対君主です。権限がどのぐらいあつたか、軍隊をどれだけ直接指揮したかは別にしても、一時は天皇陛下も戦争責任を問われるのか、国際裁判で非常に注目をされたぐらいです。

そうしたなか、新しい憲法第一条で、天皇陛下は君主ではなく、国民統合の象徴、シンボル、そういう位置づけになったのです。当然、次の天皇になられる皇太子殿下がどう考えて天皇になられるかということは、日本にとってものすごく重要です。それ

を教育できる先生は誰か。どんなにいろいろな教育者がいても、結局、そこは小泉先生しかいないのではないかと、いろいろな方たちが考えて選ばれて、小泉先生が今の天皇皇后両陛下の教育係になられた。つまり、学者としても教育者としても、それだけが抜けていたということでしょう。

そこは歴史的な、時代的な背景で縁も感じます。幕末から明治維新になったときは福澤先生です。学者であると同時に教育者であつて、慶應義塾を創設した、たいへんな先生であるわけです。その福澤先生が明治維新以降の文明開化といわれる時代の啓蒙、思想、そして近代化を進めていく日本人の教育係だったわけです。それまでの封建社会からガラッと変わるわけですから、これはたいへんなことだったと思います。日本人の感覚や考え方を新しい時代に向けて変えていかなければいけない。その先陣を切つて、『学問のすゝめ』を出されたのが福澤先生です。

日本の近代一五〇年。ちょうど義塾が創設されて、二〇〇八年に創立一五〇年を迎えました。それが日本の近代化の歴史でもあるのです。そのなかで二回大きな変革がありました。一回目は明治維新です。二回目は敗戦です。その二度にわたつて国が変

わるときに、福澤先生と小泉先生は教育者として先頭に立って啓蒙されたという立場をとられていたのです。

しかし、率直に申し上げますが、私が小泉先生をお呼びしようと思ったときには、そんなことは全く知らず、そんな歴史的な大げさなことも考えたわけではないのです。どういことがきつかけだったかというところ、これも一つの参考になるかもしれません。あるいは私はそのときから新聞記者の素質があったのかなと勝手に思っているのですが、実は私は普通部から慶應に入りました。そして、普通部生になって初めて感じたのは、自分は慶應のことを何も知らない。そのこと自体に自分自身が愕然としたわけです。

それで、にわかには慶應の歴史や福澤先生のことなど、いろいろなことを勉強し始めました。あそこにおられる同窓会長の高橋さん。幼稚舎からですから、小さいときから慶應の教育は受けているのでしょうけど、我々は幼稚舎から来た人たちにもいろいろな話を聞いたりしながら、慶應の気風や学風はそういうものなのかなと感じるものがありました。しかし、とにかくこれは勉強しなければいけないと、行き着いたのが、「あつ、福澤先生を直接知っている先生

がまだおられるんだ。それじゃあ、直接、話を伺いたい」と思って、まさに今で言うアポなし。全くアポイントなしで、広尾の小泉先生のお宅に普通部生時代に押しかけていったわけです。何度か押しかけましたが、小泉先生は全然嫌な顔をされず、自ら紅茶を入れたり、クッキーをくれたりしました。話の内容は全く忘れていきます。全く覚えていないくらい、本当に圧倒される風圧を感じました。

それから、小泉先生は焼夷弾で顔から何から、体中、ものすごいやけどをしているわけです。顔はケロイドで完全にひきつっています。しかし、面と向かって話しているときに、そういうことを全く感じさせないのです。それだけ、すばらしいオーラを放っておられました。

これを両親にも、学校にも言っていなかったものですから、だんだんばれてしまい、ある父母会で当時の校長先生、後に私は大学で、その先生のゼミを取るようになりましたが、峯村先生という校長先生が「とんでもない生徒がいる。アポイントもなしに、大先輩、それも小泉先生のところに押しかけていて、長時間話を聞いている。そういう失礼なことをやってはいけませんよ」。

半分、「そういう好奇心を持って勉強することは

いいことです」と言っていたきました。しかし、そういう失礼なことは、やはり慎まなければいけないし、そうやって背伸びして、いろいろなことを考えるのもいいけれども、もっと足元の勉強をしっかりしてもらいたいと、父母会で校長先生が言われたそうです。

しかし、私は、一人だけそういう経験をしているのはあまりにももったいないということで、福澤先生研究会というのを勝手に塾高に入ったときにつくりました。当時は福澤先生のお墓が目黒駅近くの常光寺というお寺にありました。ご命日はもちろんですが、そこへお墓参りをして、帰りに塾のことや福澤先生のことを勉強する会というか、同好会みたいなものを、親しい友達だけでやっていました。それをいずれ、どこかで皆と共有する場をつくりたいとずっと思っていたのです。

そうしたら、たまたま流れの中で、自治会が新しく全校生徒の選挙によって生徒会長を選ぶことになり、相撲部から推薦を受けて立候補して、会長になったら、まず、小泉先生の講演を皆と一緒に聞きたいな、ということ、実現したというのが最初です。

それから、歴代の塾長先生においでいただいて、塾のこと、あるいは福澤先生のこと、さらには、塾

の一貫教育について、連続して講演会を開きました。これが私の塾高時代の大きな思い出です。

結論からいうと、校長先生からは半分、お叱りを受けましたが、自分なりに「これは知りたい」という、一種の好奇心ですね。後でまとめのときに言わなければいけないと思いますが、広くアンテナを張る。これは一生を続けたいと思います。ずっと好奇心を持ち続けて、自分が知りたいことを知る。そして、何が一番正しいのか、本当のことを知りたい。あるいは本物に会いたい。これは人でもいいです。物でもいいです。

ですから、本当のことを知りたい、本物と出会いたいという気持ちを持ち続ける。そのことがものすごく大事ではないかという気がします。それは我々の先輩、あるいは同僚、後輩、アンテナをずっと張っていると、いろいろな巡り合わせが出てきます。人間関係もあります。意外と偶然のようですが、そういう偶然の積み重ねの中に本当の巡り合わせや出会い、ある種、「これが縁だったのかな」と思わせることがいろいろ出てくるのです。

しかし、アンテナを張って、本当のことを知りたい、本物と出会いたいという気持ちを持っていないと、本当の出会いを見逃してしまうことにもなりか

ねないと思います。たとえばジャーナリストの立場
であれば、特にそうです。とにかく知りたいという
ことだと思っています。



ジャーナリストを目指して

そういうなかで、ちょうど五十年前の私の塾高生時代は今と本当によく似ているところがあります。世界がものすごい、いわゆる激動期でありました。戦後、そんなには経っていないのですが、アメリカの有名なケネディ大統領が暗殺されました。その暗殺はまさに初めての衛星中継で映し出されました。

皆さんは今、全世界で何か起きてても、その実態はほとんど同時中継ぐらいです。今日も少し心配なのはシリアですが、エジプトで何があったかなどは、今、当たり前のように見ているかもしれないけれども、当時、そんなことは見られなかったのです。そういう映像やニュースは直ちには入らなかったのです。それが初めて全世界に衛星中継されるというのがちよどケネディ大統領のパレードの映像だったのです。若くて、アメリカの希望の星だけではなく、世界中が、「これはすばらしい大統領が出てきた」。『新しい時代の夜明けだ』と。特に彼は「宇宙の時代」と言ってアポロ計画を打ち上げるわけです。人間を宇宙に送ろう、月に人間を送ろうという、希望を与えました。

その大統領のパレードですから、全世界が中継を注目して見ていたのです。そうしたら、暗殺が起きた。中継中に、「何だ、これは？」と、最初は、全然わかりません。いまだに誰がどういう動機で殺したかわからない。いまだに謎ですが、そういうことがまず、ありました。宇宙時代の幕開けと同時にケネディ大統領の暗殺がありました。

そして、我々日本人にとっては日米安保条約改定、六十年安保といわれる、ものすごい闘争がありました。大学生の多くもデモに参加して、国会や総理官邸に押しかけて、激しい人たちは石を投げたりして、逮捕者が出たり、東大の女学生が亡くなるなど、いろいろなことがありました。

塾高生はまさかいないだろうと思っていたのですが、後でいたことがわかりました。やはりヘルメットをかぶってデモに参加した人がいたのです。それはいろいろ、それぞれの立場で考えることで、文連の結構、有名な先輩でしたから、おそらく大学の先輩からの影響で行ったのでしょう。その後、慶應大学の教授になりましたから、別にデモに参加したからどうということはないでしょうが、そういうこともありました。日米安保闘争というのがちよどあったのです。

そして、ベトナム戦争です。ものすごく激しい北爆をアメリカ軍がどンドンやって、今でも後遺症がずっと続いています。ベトナム反戦運動が盛り上がり、反戦歌、フォークソングが流行し、我々学生も皆、口ずさんだという時代でもあります。

お隣、中国では文化大革命が起きました。戦後、中国は社会主義体制を守りながら、しかし、世界と同じようにいろいろな経済、物については対応していかなければいけないという、理論闘争もあり、権力闘争も激しくあつたわけです。「アメリカのような資本主義は墮落だ。そんなことを言うやつはけしからん」と追及されて、中国では総理大臣クラスまでがつるし上げられました。そして若い人たちは皆、農村や工場や地方へ出されて、「若い者は一から勉強し直せ」ということになった文化大革命がものすごく燃えさかった。それが日々、ニュースで我々のところに飛び込んでくるわけです。

世界で何が起きているのか。ベトナム戦争、文化大革命、大統領は暗殺される。そして、日本国内では安保闘争でデモなどが激しく行われている。今、世の中、何が起きているのか、そういうことにおそらく多くの学生たちも、我々の仲間も非常に関心を持ちました。

そういうなかで、私の場合は、先ほど言った「本当のことが知りたい」「本物と出会いたい」という延長線だと思うのですが、とにかくそういう現場に行きたくなってきました。将来、ベトナム戦争の現場に行きたい、中国の文化大革命の現場で本当のことを見たい。あるいは、アメリカの民主主義というのは何なのだろうか。そういうものに直に触れたい。そういう気持ちでだんだん募っていきました。

まだ塾高時代は新聞記者になると決めたわけではありません。しかし、格好よく言えば、いずれ、そういう現場で歴史の証人になりたい。移り変わっていく歴史の流れを現場で見たいという気持ちでだんだん強くなっていきます。結果、経済学部に進んだのですが、新聞記者、特派員になりたいという気持ちがだんだん固まってきました。

そこでまた少し欲が出てきました。これからの時代は国際社会がどんどん密接になって、グローバルゼーションがどんどん進むだろう。それだけいろいろなことがある。だから、もちろん英語もやらなければいけないけれども、国際法も知っておかなければいけない。できたら国際弁護士の資格を持った特派員、ジャーナリストになりたいと、なぜか勝手に思い込んでしまったわけです。これも後で峯村先生

にたしなめられました。そういう気持ちになって経済学部から法学部に転部したのです。

そうしたら、当時、前例がないということで、編入試験と同じ試験を受けさせられました。「もしそこで落つちたら、だめなんですか？」と言ったら「だめだ」ということになって、相当必死になりました。そういう試験も受けて、経済学部から法学部に転部して、国際弁護士資格を取ったジャーナリストを目指すという腹を決めていたのです。

行ったら、ゼミの友人がすぐに司法試験に受かってしまいました。それで話を聞いたら、そんなに簡単に弁護士などなれるものではない、ということもわかったわけです。これはすごい勉強をしないとなかなか司法試験も受からないし、弁護士にもなれないということ、途中で国際弁護士の資格を持ったジャーナリストは諦め、ただ、ひたすら新聞記者になって特派員になりたいということにしました。

毎日新聞は一番古い新聞で、来年が一四〇周年です。私は編集、出版その他の最高責任者ですから、今年は主筆としては一番うれしく思っています。今年の新聞協会賞ニュース部門と写真部門をダブル受賞しました。これはめったにないことです。

ニュース部門の賞は、私は相撲部出身だから忸怩

たるものではありませんが、大相撲八百長です。「えっ?」と思ったのですが、とにかくお相撲さん同士がやりとりしている八百長メーを担当記者が入手したということです。「これは絶対間違いない、八百長相撲をやっている証拠だ」というわけでスクープになりました。そして、そういうことがずっと蔓延しているのでは、せつかくの国技がファンから見放されてしまうということで、大相撲改革というキャンペーンをやっていました。その八百長メーのスクープと、その後のキャンペーンで、今年度のニュース部門新聞協会賞受賞です。

二つ目の写真部門、これもいろいろ巡り合わせがあります。何の写真かという、3・11、あの大地震の大津波の第一報です。これが結果的に全世界四五〇の新聞の一面を飾りました。日本の地震、津波の第一報として世界に流れた写真です。

おわかりだと思いますが、こんなものは構えて撮れるものではありません。よほど勘のいい記者やカメラマンがいて、地震が起きてから、「これは必ず津波が来るから、飛び上がって、待ち構えて撮りますよ」という人がいたらすごいです。そういうカメラマンもパイロットもいなかった。うちの場合はどうということだったかという、たまたま北海道か

ら東北に下りてきていた。他の取材です。

春の選抜高校野球を毎日新聞社が主催している。後々、3・11の後、選抜高校野球を開催するか、社内でもものすごくもめました。あんな惨劇があるのに野球をやっている場合か、開催したら、毎日新聞社は批判を受けるのではないかなど、反対論が八割ぐらいありました。しかし、逆に考えると、こういうときだからこそ、高校生のはつらつとしたプレーを、そして、もし被災地の高校生たちも出られるのならば、その励ましになるのではないかということで開催に踏み切りました。ちなみに塾高の生徒会長のときに甲子園に出場し、私も応援で行きました。

しかし、そんなことは全然関係なく、そのときは選抜野球の高校の取材をしていたヘリコプターとカメラマンがちょうど仙台空港に近づいたときに、燃料切れになってしまいました。それで不時着のように仙台空港に降りたのです。そのとき、まだ地震が起きているのはわからない。ところがパイロットの直感で、何かおかしい。管制塔が何か乱れている。これは何かあったなというので、給油をしないで、そのまま飛び上がると、そこへ大津波がドーンと押し寄せ、仙台空港を総なめするように、飛行機も車

も何も全部飲み込まれました。ヘリコプターの真下です。そういう惨状を撮ったのです。

それでも、燃料がないですから、近い丘に不時着をしたわけです。昔だったら、それで終わってしまいますが、今や技術はすごいです。カメラのデータを携帯電話に移して、携帯電話から東京に送信して、それが写真として新聞に載った。そして、通信社を通じて全世界に流され、結果、スクープ写真になりました。第一報写真として全世界に日本の津波を知らせた写真となって、今年度の新聞協会賞を受けることになりました。

新聞協会賞には三つ部門があって、もう一つは企画連載部門です。これは当然ながら、全部、被災地の新聞社が受賞しました。密着した、現地の人々しい報道をしている岩手日報、河北新報、福島民報など、企画部門はそれぞれの被災県の新聞社が受賞しました。

また、J C J、日本ジャーナリスト会議というのがあります。これは新聞記者OBやフリーの人たちが構成している団体ですが、そこが「検証 大震災」という一連の連載記事が秀逸だったということで、J C J賞を毎日新聞に贈ってくれました。だから、結果的に今年は何と三冠王です。そういうことで何

とかぎりぎり底力を示すことにはなりました。

ことになりました。

話が少し横にそれて自慢話になりました。

それで新聞社を目指すとき、どうするか。当時、毎日新聞は外国のニュースについて、ベトナム戦争も文化大革命の報道も、アメリカの混乱も的確かつ、非常にわかりやすく、インパクトのある紙面づくりをしていました。だから、多くの新聞記者を目指す若い学生たちは、できたら毎日新聞の外報部の特派員になりたいという気持ちを持ちました。

しかし、そのときの外信部長は社をクビになってしまいます。これもなかなか厄介なことですが、ベトナム戦争でアメリカ軍が誤爆をして、一般の何の罪もない村民や病院にまでたいへんな犠牲を出しているという報道をしたわけです。それに対して、アメリカから「そんな事実は全くない」と、猛烈な怒りと抗議が殺到しました。

毎日新聞としては絶対の自信を持って報じたことではあるけれども、戦場ですから、それを争うという余裕がないまま、本人が社を辞めると言って去りました。

私が入ったのはその年です。それでも「何とか特派員ぐらいにはなれるのではないか？」と簡単に考えていたのです。そうしたら最初、熊本支局へ行く



「環境庁」の名付け親

別に特派員と差別をするわけではないですが、行つて、すぐ水俣病です。それまで水俣病の「み」の字も知らない。行つたとたんにライバル紙のスクープだったわけです。「何だ、これは？」という感じで、水俣病で水俣の漁民の患者さんの家にずっと寝泊りしながら取材して、メインでやっている先輩記者のお手伝いをする。最初はこういう仕事が続きました。

続いて、ハンセン病。昔はライ病と言つたのですが、鼻がもげてしまつたり、耳がなかったり、手足が溶けてしまつたようになっているといふ病気で、長い間歴史の中で、このハンセン病は遺伝病、伝染病として、徹底的に隔離され、差別をされていきました。しかし、医学が進歩して、これは普通の病気の一種だから、最初の早いうちに、隔離しないでちゃんと治療を施しておけば治る病気だといふことがだんだん出てきました。

熊本には国立療養所菊池患楓園という、有名なハンセン病患者の施設がありますが、そこを全国で初めて一般公開する前に新聞記者に公開することにな

り、現場に私は行かされたわけです。しかし、今でも胸が痛むというか、自分で意図的にやつたわけではないですが、やはり偏見というのは怖いもので、運んでこられたお茶が結局、飲めなかつたのです。見ていると、他の記者もカメラマンも皆、そうでした。何かうつるのではないかと思つてしまふのです。「そうではないから、きょうから公開をして、皆に見せている」という趣旨で取材に行つていることは頭の中でわかっているのです。しかし、お茶を飲まなかつた記者やカメラマンの前に、どんなふうに見えるかは感じたかと思うと、今でも胸が痛みます。それが二番目の取材です。

そして三番目、また次から次へと社会問題ばかりと思うのですが、今度はサリドマイド児です。両方とも肩からすぐ手首になつている、まだ幼稚園の辻典子ちゃんという本当にかわいくて、聡明な頭のいい女の子。そして何よりも、足で何でもできる。手は動きません。手は肩からそのままついているけれども、何もできないわけです。しかし、徹底的にお母さんが訓練をされて、足で絵は描くし字は書くし、何でもできるのです。少し手伝えば、着物の着替えなども足でやつてしまいます。

だから、彼女にとつてもお母さんにとつても、こ

のまま普通の小学校に入りたい。友達と一緒にそのまま小学校に進学したいという強い気持ちを持っていたのです。それに対して教育委員会も学校も、あるいは他の父母も悪気はないけれども、「それは無理じゃないですか」「手がないままで、他の子供と一緒に小学校生活を送るなどというのはとても無理ですよ」、「決して偏見ではなく、本人のために、やめたほうがいいですよ」という運動が起きてしまつて、なかなか入れません。

しかし、ご本人は絶対入りたい。本当にかわいい女の子で、会うたび、取材に行くたびに、我々、新聞記者に訴えるわけです。それで皆、「よし、やろう」。いろいろな障害があるかもしれないけれども、何とかあの子の願いをかなえてあげようと各社連携してキャンペーンをした結果、普通学校への入学を果たすことになりました。長じて、その子は成人し、市役所に勤めて、新聞記者を相手にする広報担当になりました。

ですから、最初、水俣病で患者さんの家に寝泊りして、ハンセン病の公開、そしてサリドマイド児の薬害事件にぶつかってしまったのです。特派員をやるつもりが、少し違う道に入ってしまったと半分は思いながら、しかし、新聞記者の仕事はこちらのほ

うがむしろ大事で、まず、これをきちんとやらないとだめだ。それらがすべて、私の今のいろいろな活動の原点になつてきています。

まず第一は、今、環境省といいますが、あれが四十年前にできたときは環境庁です。実は私はその名付け親です。これは本当に巡り合わせ、縁だけです。今申し上げたように熊本で公害や薬害の事件をずっと担当していたわけです。それでちょうど佐藤内閣末期、一九七一年ですから、四十年前です。塾高生のときは五十年前ですが、それは四十年前、塾高から十年後です。そういう意味では、皆さんも十年後、何が起きるかわからないですよ。

全国に公害がものすごく広がりました。大気汚染や水質汚染、カドミウムの問題、有機水銀の問題、ヘドロの問題、そういうものがどんどん出て、社会党や共産党が推薦する知事や市長が、次から次へと誕生していきました。当時、自民党の圧倒的全盛時代、保守時代でしたが、革新自治体という時代が起きるのです。

その原因は全部、公害問題です。つまり急成長した日本が高度成長し、経済的には豊かになつたけれども、その結果、意図的ではなく、悪意もないけれども、いろいろな問題を起こした。その最たるもの

が公害です。大気、水を汚染してしまった。土壌、漁場を汚染してしまった。今の放射能と同じです。「想定外だ」と言いながらも、目に見えないかたちで、いろいろな物質、害毒を与えるものが噴出してきたわけです。

それは当時の政治でいうと、自民党全盛時代、保守政治の高度成長のゆがみの結果だったということになる。国民も「これは反省しなければいけない」。ちゃんと厳しくチェックするためには知事や市長、あるいは国会議員も、社会党や共産党の革新のほうがいいということで、どんどんそういう状況が生まれてしまったのです。

それで当時の政権、総理大臣はものすごく危機感を持ったわけです。これを取り切るにはどうしたらいいかということで、もう時代は変わった。今までのようにどんどん垂れ流していればいいというものではなく、公害をきちんと規制するべきである、経済的に発展すればいいというものではなく、公害を同時に防止しながらやらないと、これからの経済あるいは企業は成長できない。そのように時代は転換していくのだから、そのための制度や法律を整備しましょうということ、公害だけを中心とした国会を開きました。

これを公害国会といいます。一九七一年です。翌年が沖縄返還です。これまた話が長くなるからやめますが、沖縄返還に関しては、私の先輩の毎日新聞の記者が機密漏洩事件といって逮捕されるという、とんでもない事件が起きました。その前年の七一年に公害国会が行われました。

当時、東京には公害を担当する記者がいませんでした。それでこの新聞もテレビも全国で公害取材してきた記者を召し上げて、国会担当にしました。それが私の政治とのかかわりの最初です。

その国会をずっと取材、報道し、最後に公害国会でできた法律や制度をどうするか。今、復興庁や原子力安全庁、消費者庁など、いろいろな新しい省庁をつくろうとしています。ちやうどあれと似た新しい庁、役所をつくることになったわけです。これも大変でした。それぞれ役所の縄張り争いがある、どういう役割と権限を持った役所にして、誰が主導権を持つのか。当時は厚生省と通産省が激しく主導権争いをやって、そこに大蔵省、今の財務省が調整役で入ってきます。

これがまた最後、名前が決まりません。どこの企業合併でもそうです。合併するときのたいへんな問題は名前です。つまり二つの企業の名前、上にする

か、下にするか。たいしたことないと思うでしょう？
これがそれぞれの会社にとってメンツ、誇りなので
す。最後の最後、合併は名前でもめめます。役所も企
業もそれで皆、困ってしまい、ひらがなか、カタカ
ナにしてしまうのです。両方とも諦めて、前の名前
は捨てるというやり方をします。

そのときもご多分に漏れず、名前がなかなかでき
ません。それで担当大臣のところに夜討ち朝駆けと
いうのですが、私も当然、夜中に行ったり、朝早く
行ったりしていました。そうしたら、大臣から、「も
めてて、なかなか名前が決まらない、いいアイデア
はないか。記者のほうから、何か提案してくれよ」
という話だったのです。

そのときに採用されるなどと、こっちは全く思い
ません。耳学問ですからね。熊本時代にそれなりに
勉強はしているわけです。そうすると、公害対策庁
や公害調整庁、公害何とかという、いろいろな候補
はあったのですが、そうではなく、欧米ですすでに
環境という言葉が当たり前になっていました。四十
年前の日本で環境という言葉は、ほとんど使われ
ていなかった。今でこそ家庭環境とか、何とか環境と
か、何でも環境がくっついていますが、当時、まだ、
環境という言葉はほとんど誰も使っていません。

そのときに、私が半分冗談のような軽い気持ち
で、「欧米ではもう環境という言葉です。どうせ新
しい役所をつくるのなら、もう、環境という名前に
しちゃったほうがいいですよ」。こう言ったら、そ
の大臣が目を輝かせて、「よし、なんでもいいから、
とにかく、その資料を持ってこい」と言って、私が
持っていった資料を基に、そのまま翌朝、総理大臣
のところに駆け込んで、了解を取って帰ってきてし
まった。

役所は皆、抵抗したのだけれども、後の祭り、ど
うしようもなくなっちゃった。それで今の環境省と
いう名前ができたのです。だから、本当に巡り合わ
せです。こっちは本気で採用されると思って提案し
たわけでも何でもないのに、そういう取材の積み重
ねが巡り合せで、かたちになって出てる。

これがちょうど四十年前でした。だから、今、改
めていろいろなことを考えました。今度、原子力安
全庁も環境省の外郭につくるという。私は、これに
は反対しました。環境省と原子力は全く別ですから
ね。役所を一緒にする、離すというのはなかなか厄
介な問題です。しかし、環境省は今から、なおさら
もっと大きな役割を持つようになっていきます。環
境問題抜きに、政治も経済もあり得ません。そうい

う時代になったという感じを非常に強くしています。世界的にもそうですし、日本はますます、その問題が深刻になってきているのではないかと思えます。



森を守ること

その関係ですつと私は政治記者で、今は主筆ですから、そういうことは離れています。きょう、今ごろ何が起きていますか考えます。シリアはどうなったか。EU首脳会議を開いているが、ヨーロッパは大丈夫か。あるいは日本は二人の大臣が問責。「あなた方は大臣の資格ないよ。やめなさい」という野党の決議案が、おそらく採択されているでしょう。

つまり、「あなた方は資格のない大臣だから、だめだよ」というのが通ってしまう。しかも一人は防衛大臣、もう一人は国家公安委員長です。自衛隊のトップと警察のトップ、日本の治安を束ねるトップ二人が野党から「だめ。資格なし」とやられて、この時間に通っている。これは日本の政治にとつてもたいへんなことです。

だから、あちらこちらでガタガタしていますが、その中で私の仕事は、「明日の新聞はどういう新聞にするか」「どういふ社説をつくるか」ということを、編集局長や論説委員長から相談を受ける立場です。これをどう判断するか。

私が今、一つ重要な世界的なテーマだと思うのは環境です。環境庁の名付け親という縁で、イオン環境財団の評議員や植林のNPO理事長、あるいは環境団体などの理事など、いろいろなことをずつと、この間やってきました。

そういうなかで、たとえば最近、タイで洪水が起きました。あれも植林をする仲間が「危ない」とずつと言ってきたのです。特にイオン環境財団は、日本のこれからに、ものすごく密接です。中国の砂漠化を阻止する。東南アジアもこのまま放っておくと、乱開発と森林伐採はひどいことになるので、ここにも植林を進めないといけない。そういうことを両面ですつとやってきている環境財団です。

今、企業もいろいろなたちで植林など、環境保護活動を行っています。やらざるを得ない。そうでなければ企業とは言えない。そういうことをきちんとやっている企業というのは、これから皆さんが企業選びのときの大きな基準になってくるのではないかと思います。そこにどれぐらい力を入れているか。

なぜタイが危ないかという点、森林伐採と乱開発がものすごく目立っていたのです。その前には東南アジアの南のほうはマングローブの林の伐採です。アマゾンの有名な熱帯雨林もやられている。しかし、

東南アジアについては、日本人は本当に考えておかなければいけないのです。なぜマングローブの林を皆、伐採してしまったのか。エビの養殖場にしてしまったからです。そのエビを食べるのは日本人です。今は中国人もどんどん食べるようになりましたが、そうやって木を伐採している。

この間のタイの洪水でわかったと思いますが、日本企業はあそこに工場など五百社が出ています。あの洪水のために自動車会社はアメリカの工場の操業までストップせざるを得なくなってしまう。そのぐらい複雑に入り組んでいるわけです。タイにある部品工場が水没してしまったものだから、アメリカの工場が自動車をつくれなくなった。

そのように経済というのはいきなりすぐ密接に結びついています。何が言いたいかというと、今、地球は温暖化ですから、どんどん海面が温かくなって、それだけ水蒸気がどんどん上がって、雲が出てきて豪雨になるわけでしょう？ 台風も規模が大きくなるし、激しくなる。集中豪雨も規模が大きくなっていくわけです。

この間、紀伊半島を襲った台風12号もそうです。15号のときは、私はたまたま被災地を回るときに台風と一緒に北上してしまって、石巻に着いたら避難

勧告が出て、仙台にあわてて戻ったら、仙台も低いところは全部水没するという。これから日本列島もタイのようになります。ものすごい勢い、スピードで、今、豪雨、台風の規模は強くなっていますから、大変です。

これは冗談で聞かないでくださいよ。この間も名古屋の経済界の人に「名古屋はこのまま放っておくと、全部水没しますよ」。「地震になって津波が来るからではないです。これからは台風だけでだめになります」と言いました。しかし、半分、まだ脅しと取られます。決して脅しではない。そのくらい、地球の気候変動は激しいのです。

そのために何をやらなければならないのか。それぞれやることはたくさんあるのですが、少なくともいちばん大事なことは森を守ること、森林を増やすことです。そうでなければ、CO₂を吸収したり、あるいは普通の人間が快適に暮らせる自然環境は守れないのです。そういう全く新しいテーマが今、地球にも、あるいは日本にもしかかってきているということ、何を仕事として選ぶにしても自覚しておいてもらいたいです。それはあなた方、皆さんが社会に出たときには、否応なく、直面する問題にはなるだろうと思っています。

今のところ、私なりにやっている植林活動は日光の足尾銅山跡、もう一つは八幡平の松尾鉦山跡です。両方とも公害ではげ山になってしまっています。百年はげ山のままであったその急斜面を、とにかく穴を掘って、腐葉土などで土をつくって、その穴に埋め、それから子供たちも参加して、ドングリから全部集めて、ポット苗で育てて、それを植林する。植林活動でも一から全部、きちんとやるという運動をやって、七年目に入りました。ようやくはげ山だったところが、うっそうとはまだいきませんが、いずれ、森が戻るくらいのところまで近づいています。

そういうことをどんどん全国でやらなければいけないのです。そして今、目の前で植林だけではだめだとわかったのは、日本の森がどんどん枯れ始めました。これはいろいろな理由があり、複合的です。これは本当にシヨックですよ。皆さんにとって、将来、たいへんなことです。

戦後、松枯れという問題がありました。これはマツクイムシと酸性雨でした。東北は津波で流されてしまいました。ポランテアなどが、いろいろなことをやって何とか抑えてきました。

日本は世界でも有数の森林王国です。国土の七割が森林、木と森です。そういう国土ですから、日本

が誇るべきものは自然です。そして、そのうちの六割弱が国有林です。これもここの二、三年、急速にだめになってしまいました。

それはなぜか。戦後、経済復興のために……。だって、我々が生まれてすぐのころは食う物が何もなかったですからね。私が生まれたのはまだ戦争中ですから、戦後、貧しいなかで、日本の木は質もいいですし、復興のために家も、工場も建てなければいけない。いろいろなものにどんどん材木を使うわけです。

そのため、いい材料であるスギとヒノキをどんどん植えました。人工林です。これが、ほとんど国有林です。しかし、今度は外国から安い材木がどんどん入るようになりました。それが伐採にもつながっていつているのです。外国の木を安い労働力でどんどん切って、日本に持ってきて売るということになつたものですから、日本のスギやヒノキは高く使えない。労働力もかかる。そういうことで手入れができなくなつてしまつた。

木、森というのはちゃんと枝を切り、下草を刈る。いちばん大事なのは間伐です。必ず定期的に木を抜いておかなければいけない。日が当たらなくなりますからね。簡単なことです。これだけのことをきち

んとやっっていないと、森は健全に育っていかないのです。それが、だんだんできなくなりました。

そして戦後六十何年経って、ついに木が枯れ始めている、根がやられ始めたのです。だから、ああいう被害が台風で起きてしまう。土砂崩れになってしまうのです。それは根が皆、やられて弱くなっているからです。

学者は「まだ科学的根拠がないからあまり言わないでください」と言うけれども、きょうは塾高だから言ってしまう。スギ花粉やヒノキ花粉がどんどん出てくる。あれは木からのSOSです。我々はどう死ぬ。だから、どんどん花粉を出して子孫を残したい。そのくらい、今、日本の針葉樹林の国有林はやられて、寿命を迎えつつあるのです。それならば、いろいろな手立てをこれからやるのです。

同時にここ四、五年、とんでもないことが起きてきました。ナラ枯れです。それがブナ枯れに広がっています。そしてシイ、カシという広葉樹林までが、日本全国で急速に枯れ始めています。

八月に京都でシンポジウムがあつて行ってきました。なぜ京都だったのかというと、京都がいちばん激しいからです。スピードもやられ方も激しい。びっくりしますよ。街路樹の根本にはビニールを巻いて

います。あれは虫が入らないようにしているのです。しかし、有名な神社仏閣の木が皆、すごい勢いで枯れ始めているのです。

この原因については簡単には言えません。外交的にデリケートなところもあります。しかし、京都の枯れ方の激しさが去年から琵琶湖畔に広がって、六甲山を越え始めた。あのあたり全体が来年、本当に枯れてしまう。大事な神社仏閣の森林が皆、やられる。これは間違いなく日本の国がやられるということです。だから、何とかしなければいけない。これを食い止める。

その手立てを今、一生懸命しているのですが、なかなか追いつきません。今度の3・11で皆、鴨長明の『方丈記』を読みました。私も何度も繰り返し読みましたが、時代の大変なときは、ああいうことがあることを、皆さんも参考に『方丈記』を読んでみてください。『方丈記』が書かれたのは八百年前で、書いた鴨長明の実家は下鴨神社です。あそこには有名な水源地を持った「糺の森」があります。これは広葉樹林、針葉樹林もありますが、今年すでに百本切り倒しました。放っておくとどんどん伝染してしまふから、間に合わない。そして、年内にまた百本切らなければならぬ。宮司は本当に頭を抱えてい

ました。

そのくらいすさまじい勢いで日本の森が今、枯れ始めています。だから、皆さんも手伝ってください。木が枯れる、森林がやられるのを食い止める。しかし、原因は複合的でわかりにくいのです。

我々の今までの植林経験、土づくりの経験からいうと、一つは炭、チャコールです。特効性があることは間違いないです。炭はいろいろな性格を持っています。吸着力がすごい。そして、必ず微生物がものすごく集まってくるのです。だから、今まで我々の活動の中で弱った木の根元に炭を埋めたり、あるいは灰をまくと、必ずバクテリアが集まってきて、その周りには必ずミミズが出てきます。そうすると土を改善してくれる。そして根が強くなってくる。

木というのは根です。根は土なのです。そういう効果の表れ方がはっきりしているので、今、我々のNPOは一生懸命、炭まき運動を全国で広げて行っています。しかし、なかなか追いつかない。どんどん枯れている。

これも学者から怒られますが、なぜクマ、イノシシが出てくるか。彼らの主食はナラのドングリです。そのナラが枯れていっています。特にクマはナラのドングリを腹いっぱい食べないと冬眠できません。

そういう因果関係があります。昔なら奥山で暮らさなくなっても、人里まで出てこなくても、里山というのが中間にあったのです。しかし、今や日本の農村で里山も荒れてきました。だから、クマやイノシシにとっては、境がわからなくなってしまったのです。それで奥山でえさがなければ、裾野に近い、人の住んでいるところに出没してしまう。そしてかわいそうに、クマもイノシシも皆、撃ち殺されてしまうわけです。

だから、今、いろいろな環境団体の中にはクマやイノシシが安心して暮らせる奥山を守ろうという、名前もそのものずばり、熊森協会というのがあります。これも我々のNPOといつも協力している団体ですが、全国に広がっています。

もう一つ、森林の問題で言えば、外国企業が今、日本の森林をどんどん買収しています。北海道などは顕著でこれも深刻です。しかし、日本人はまさか森が買われるなどと考えたことがなかったのです。彼らは水源近くの森を買うのです。これは何年後、世界中が水戦争になることを考えているわけです。

日本にはものすごくおいしくて、豊かな水があるわけです。でも、彼らから見ると、日本人はそれをただただ、毎日、平気で捨てている。日本人が勝手

に捨てているのだから、将来、我々がもらってもいいではないか。

なかには、「我が国は水が今でも足りなくなっている。だから、井戸を掘ってくれる日本には感謝しているけれども、私が祖国に貢献できるのは、このいい水を祖国に送ることだ」と本気になって言う人もいます。だから、どんどん買収が進んでいます。全国の、しかも水源地の森です。

そういうかたちで日本では森が今、危機に瀕しています。これはおじさん、おじいちゃんに言っても、今さらという感じが少しあって、運動にもなかなか参加してもらえない部分があります。きょうは若い塾高生だから、おそらく将来、ずっとこの問題を皆さんは抱えていくと思います。そういうときに日本という文化、歴史は森林でできている。どんなものでもそういうものがありますから、そういうことを一回きちんと考えておく、そういう時代になったという気がしています。



自然との会話

最後に今日、同窓会と大谷校長先生のご好意で私のNPOで出した絵本をお配りします。これが何と百年前にあの石川啄木が書いた物語です。年齢からいうと、彼がまだ二十一歳です。題字と発刊の辞は私が書いています。少し偉そうに書いていますが、毎日新聞の社内の張り出しも、今年の正月元旦もそういう書き出しで書きました。「今、世界も日本も文明の岐路に立っている。たいへんな時代だ」と。世界も日本も激動の中に、政治も経済もあるということを書いていきます。

その後「3・11」が起きました。

さすがに社内では石川啄木には触れていませんが、3・11でもう一度見直されたのです。パリでは宮沢賢治の詩がフランス語で朗読されました。そして、ワシントンやニューヨークでは石川啄木の詩が英語で朗読されて、共感を広げています。それは東北だからということがあるのでしょうか。そして、日本人がああときすごく褒められました。「政治はだめだけれども、すごいね」と。今でも私たちは外国の特派員から言われます。「すごいね、日本人とい

うのは、日本の国民は」と。
各国から来た救援隊が皆、感動したわけですから、どういうことか。

まず避難所に行ったら、皆、異口同音に「我々は避難所まで来られたのだから、まだ幸せです。まだ、そうじゃない人がたくさんいるのですから、救援隊が行くのなら、我々より先に向こうに行ってください」と、自分たちのことを後回しにしていると言っているのが一つ。

それから、各国、遠くから来ているわけですから、その人たちに「遠方から来てもらって、何もお礼ができない。皆、失ってしまった」ということを心からおわびして、そのへんにあるものでも、何でもかたちでお礼をしようとする。

この二点に彼らは皆、感動しています。そして、自分の国に帰って、そのことを伝えたものだから、日本という国民は何なのだと。特に被災地の被災者のあの冷静沈着、そして一生懸命助け合おうとしている。被害者なのだから、何を要求してもいいはずですよ。「遅い。何でもっと来ないんだ」と言ってもおかしくないのに、そうじゃない。「我々は後回しでいい。もっと苦しんでいる人がいます」。そういうことを言う国民、民族があるだろうかという、す

ごい称賛だったのです。

これは忘れてはいけないうね。なぜ、あのとき、日本があんなに称賛されたのかわからなかったのですが、そういうなかに自然というものとの会話があるのだと思います。やはり人間は自然に対して謙虚である。しかし、いつのまにか傲慢になってしまう。

そのことを啄木は百年前に物語で書いています。サルと人間に徹底的な文明論を戦わせています。サルが人間に言うのです。「あなた方人間は最近、豊かになった。便利になった。何でもできるようになってしまったと、胸を張って、偉そうにしているけれども、我々祖先から見ると、どんどんなまけて弱っている。手足が弱っているということは、いずれ、頭も弱るよ」。

それに対して、人間が怒るわけです。「何を言っているのか。おまえたちサルは毛が三本足りないから、いつまでたっても文明というものを手に入れられなくて、そうやって裸でいつまでも森の中をうろつきまわっているだけじゃないか」。そして最後に、「たとえばこの森を我々人間が焼き払ったら、おまえたち、それはどうするのか。焼き払ったら、命乞いをするしなくなるだろう」と言ってしまうので

す。

それに対して、サルが「とうとう言っただけな地獄の言葉人間は言ったな。あんた方、勝手に滅びるのはいいけれども、自然だけ、森だけは破壊しないでくれ。これはあなた方人間だけじゃなく、他の動植物全部の命の源なんだ。それだけはやめてほしい」。

こういうことを言っただけ、けんか別れをするという。すごいですね。百年前ですよ。二十一歳の青年。一人の詩人の感性でしょうけれども、まさに今にびつたりです。そこへ3・11がきて、改めて、これが注目されました。

自然の脅威、圧倒的な、我々人間の力ではどうにもならない力に対する謙虚さ、傲慢になってはいけないということはこの物語は教えています。そういう意味で、これを出しておいてよかったなと思っています。今、口コミで依頼が多く、いろいろな学校あるいは図書館の朗読会などで使われることが、3・11の後、急速に増えてきているところですよ。

きょうは何の話をするか、ずいぶん迷ったのですが、一つは小泉信三先生の講演会の話から、ジャーナリストを選んだいきさつ。これも皆、巡り合わせですよ。自分から意識的にそのときの状況によつ

て、「これをやりたい」と思った。繰り返しになります。おそろくどんな仕事に就くにしても、必ず好奇心を持つて、アンテナを高く広く持つて、何かのサインを見逃さないようにすることが大事です。

私の場合は本当のことを知りたい。本物と出会いたいという気持ちを常に持ち続けたい、ということが、いろいろな巡り合わせを活かすことにつながったように思います。誰にも合うかどうかはわかりませんが、一つの参考として覚えていただけたらとありがたいと思います。

以上で、終わります。どうもありがとうございます。
した。(拍手)

司会 岸井様、ありがとうございます。続いて、質疑応答に移らせていただきます。



日本の水

生徒A (三年生) 日本の中で一番おいしい水が飲める場所はどこですか。

岸井 日本一おいしい水というのはそれぞれ皆、自慢していますが、これも地球環境、温暖化の影響だらうけれども、だんだん北上しています。因果関係はわかりませんが、熊本や大分の名水、九州でおいしいと言われていたものがたくさんありますが、だんだんおいしい水が北上している感じがします。

それともう一つは、カキの養殖をしている畠山さん。一緒に植林をずっとやってきた気仙沼の方で、世界中のカキの稚貝はあそこのもので。一時期、十四〜十五年前、広島のカキも気仙沼のカキもあつたり、おいしくないといわれる時期がありました。それでなかなかとれなくなつた。

畠山さんの偉いところは、これは海も汚れているが、どうも川が汚れて、川の水の質が変わってきて、海の質も変わってきて、貝が育たなくなつたのではないかと気がつくわけです。それで、「カキの養殖なのに何をやっているんだ？」と言われるぐらい非

難を受けながら、植林活動を始めます。我々も応援し、我々の活動にも彼に来てもらって、協力しました。

そうしたら何と彼の予見が当たって、植林をした結果、水がきれいになった。海もきれいになった。だから、彼の書いた本は『森は海の恋人』という。そういう思想につながってやっています。

だから、本来きれいだった、おいしかった水も森を荒らしていると、必ずだめになります。そういうことを個別に見ていかないとわからない。

先ほど言ったある国が買ったところは三重県の水源地近くの森です。その外国人に言わせると、「こんなおいしい水はない。それを日本人はただ毎日、捨てている」と言います。最初、「捨てている」というのは何の意味か、さっぱりわからなかつたけれども、言われてみると、日本人はそんな感覚は全くない。

しかし、これからはそうではありません。あなた方の世代は、守らなければ、きれいでおいしい水はない。そういう時代に入ってしまったのです。

生徒A 水を安定的に供給するためには、どうすればいいですか。

岸井 もともと日本は森林王国です。雨量も適度

に豊富です。だから、この自然が守られている限り、日本の水の供給がおかしくなるということはありませぬ。

それがだんだんそうでなくなっていくのではないかなということが、大きな懸念です。それも十年、二十年先ではなく、あつという間にきます。一度壊れてしまうと、元に戻すのは本当に大変です。

たとえばあまり言いたくないけれども、気仙沼と同時にだめになったのは広島のカキです。広島はカキがいちばん有名でしたが、それもやられた。それで同じように植林を始めましたが、なかなかだめ。あれは関西空港をつくるときに瀬戸内海の砂利をあまりにも掘りすぎた、その結果の水質汚染が元に戻らない。だから、しばらくカキはだめです。

今、広島も気仙沼のカキの稚貝を持っていつて養殖をしています。もちろんパリでもニューヨークでもそうです。だから、気仙沼はすごいです。たった十年、植林した結果です。森というのはすごい力を持つているのです。おサルさんが「切るな」というのは、よくわかりますよね。そこが大事ではないですか。

それとも、日本の水が危なくなってきたことに対して、どう対応したらいいかということ聞き

たい？

生徒 A 自分が飲める水がなくなるのは阻止したい。自分の量だけは(笑)。

岸井 皆の水のことを考えなければだめですよ(笑)。外国からもいろいろ何とか水といって、売られるようになっていきます。皆、ペットボトルで飲んでいきますよね。我々の世代ではちょっと考えられないことだけれども、そういうかたちで、ヨーロッパなどから買える分にはあります。

しかし、地球全体が今、おかしくなってきたから、そうではない時代が来てしまうかもしれない。日本は、特にいちばん豊富できれいだった、おいしいはずだった水がやられている。それはなぜかというところ、森がやられているからです。クマもイノシシも皆、やられている。おサルさんも困っています。人間だけではないと、石川啄木が言っているわけです。皆、自然の中で一緒、サルも人間も植物も生きていくうえで同じではないか。そういう思想だと思います。

外交交渉の難しさ

生徒B (三年生) ぼくは将来、外交官になって世の中を変えたいと思っています。三月の地震に直面して、世界を変えるには中央に入らなければいけないと、その思いはより強くなり、外交官になりたいと思います。しかし、昨今、本やニュースでもよく見るように、外務省の中でも汚職や腐敗など、特に国民が官僚を絶対悪のように見ているところがあるとあります。

一方で福澤先生などは、ずっと公に入るのを潔しとせず、民間人を貫かれたのですが、将来、世界を変えるためには、ぼくは官僚になるべきなのか、それとも民間人として、ずっと言論のトップに立ち続けるべきなのか、いろいろ迷っているところがあります。アドバイスをいただけるようでしたら、お願いします。

岸井 まず、こちらから聞きたいのは、どこをどう変えたいのか。それによるよね。

生徒B 日本の今の自分たちがいる立場が非常に不条理だと思うのです。

岸井 なぜ？

生徒B ナシヨナリズムではないですが、国民が自分たちを敗戦国として不条理な裁判などを経て、自分たちのあるべきところを失っていると思います。だから、国民がもっと自分たちに自信を持てる国にしたいと思います。日本が今、そういうのができていない。そこが一番おかしいと思っています。

岸井 だいたいわかった。しかし、忠告を一つしっておくと、あなたはそれを思い込みすぎ。言われるとおり、よく自虐史観や東京裁判の不条理など言われます。しかし、戦争に負けたことは事実であり、日本が仕掛けていったことも事実で、それによって、どれだけの犠牲者がいるか。日本人も三百万人以上死んでいるのだけでも、それについて、全く責任がないということは、ないわけです。

だから歴史上、必ず負けた国は勝った国に裁かれてしまう。それを戦後の日本は甘んじて受け入れた、日本人の選択だったので。

だから、それをまだ引き継いで、ずっと不条理のまま、日本人が自信をそれによって失っていると思いついて、日本が自信をそれによって失っていると思いついて、世界に向かつて胸を張って日本の立場を主張したい、皆に理解してもらいたいというのは、やろうと思えばいくらでもできます。それは企業戦士も外交官もやっているし、

いろいろなことをやっています。

しかし、ご存じのとおり、制約があります。憲法九条があります。日本は最後、力ではやれない。戦争、戦力を放棄したのです。本来なら、自衛隊は合憲かどうかと、またたいへんな議論になってしまうけれども、基本的にはどこの国だって戦争放棄しようと、攻められたときは戦う権利はあるだろう。つまり自衛権はどんな国であっても、負けた国であっても保障されるべきだということで自衛隊という名前になっっています。だから、日本の場合は軍隊と言わず、あくまでも自衛隊です。自衛権を行使するためのもです。その代わり、攻めていくことや先制攻撃は絶対許されないというのが一応、憲法上の解釈になっっている。

そうすると来年、仮にあなたが外交官になったとしたら、領土問題に直面します。中国と尖閣、韓国と竹島、ロシアと北方領土です。戦争処理というのは戦後賠償と領土問題です。領土を画定して、負けたほうが勝ったほうに賠償金を払う。これによって戦争は終結するのです。それをずっと日本はいろいろな国といろいろなかたちでやってきた。非常に複雑な関係です。

しかし、結論から言って、一五〇年、一二〇年と

いう近代史の中で、日本は日清戦争、日露戦争をやつて、これは勝っているのです。そういうなかで近代国家としてのいろいろな領土問題がスタートしています。そこにさかのぼるのです。

中国は今、尖閣諸島を領海法で固有の領土と明記しました。そして、教科書で、「しかし、一時期、日本が不当に占拠した」という記述をして教え始めました。それはどういうことを意味するかというと、中国は今後一切、尖閣諸島については譲らないというのです。

韓国と竹島はどういう関係か。これも日韓基本条約締結以来、ずっといろいろな歴史があります。

今の尖閣で言えば、私は日中平和友好条約締結交渉のときに北京へ行つて取材しました。だから、そのときの中国とのやりとりや会見の流れなどは全部、直接取材してわかっています。事実はずっと棚上げだったのです。日本は日本固有の領土だと言いますが、実態は、外交上は棚上げだった。それを中国は今年から棚上げではなく、我々の領土だとはっきり言い出したということですよ。

それに対して、韓国は、「すでにこれは昔から我々の領土だ。さあ、どうするの？ 日本が取り返したのなら、自衛隊を派遣しなさいよ。やれる？」。そ

ういうところまできました。既成事実として竹島は、日本は日本の領土だと今でも主張しています。今後、交渉でも主張し続けます。しかし、韓国は絶対譲りません。そこまで変わってきた。

そして、ロシアだけが今、少し中途半端ですが、北方領土は四島、国後、択捉、歯舞、色丹とあるわけですが、大きさは皆、違います。ずっと二島返還か、四島返還かといった、いろいろな議論があったけれども、日本は戦後一貫して四島一括返還です。本来、あれは日本の領土なのを戦争で日本が負けたとき、どさくさに紛れてロシアが占拠した。不当に占拠しているものだ。だから、返してほしいとずっと主張してきているわけです。

しかし、今、メドベージェフ大統領以下、国防大臣から国務大臣、全部の閣僚が択捉、国後に入って、予算をつけてインフラを整備し、この二島だけは絶対譲らないという対応をとっています。しかし、歯舞、色丹にはまだ触れていない。どういうことを意味しているか。今後、日本が歯舞、色丹の二島だけを返してくれと言うのならわかるが、四島はもう受け付けられないよということです。

こんなことは日本の歴史上、初めて起きた。歴史学者に言わせると、おそらく日本人はDNAでそう

いうことをやったことがない。つまり、奪われたり、どこかへ帰属してしまったような領土を、本来であるならば取り返す。もし、どうしても返さないのなら、実力で取り返すというのが領土でしょう？ 昔から。今、それをやれるかどうか。

そうすると、あくまでも話し合いで解決するのか。自衛隊を派遣して実力で取り返すのか。そのとき、アメリカ軍が応援してくれますか。日米安保ですから、密接ですよ。あるいはもう放棄しますか。あげてしまいますか。こういう決断を迫られたことは、日本民族歴史上ないことが、来年から始まるのです。

「どうなっているの？ 日本は」と、あなたの不満がどんどん大きくなるだろうと思いますが、そういうところに直面してくるから、そこでどうやったら、日本の本来の主張を貫けるか、もう一回、歴史を一から全部立て直さなければいけない。そのくらい難しいところに来ている。

批判するのは簡単です。「何をやっているんだ、政府は。弱腰じゃないか。何で日本の領土なのに取り返さないんだ」となってしまう。これも危ないよ。そういう主張をしている人はたくさんいますが、それだけでは解決しない。交渉事は相手があることです。

しかし、そうやってどんどん向こうが強くなってくるのを許してしまった。これは政治が混乱を続けてきた責任でしょうね。足元を見られている。毎年、総理大臣が替わって、外務大臣が半年ごとに替わる。今度も、もし替われば、三カ月で防衛大臣が替わってしまう。どこの国もそんな国を相手にしませんよね。そこはものすごく足元を見られて、たいへんな岐路で、瀬戸際だという気はしています。

そこは反省しなければいけないし、きちんと立て直さなければいけないけれども、あまり誇りを失って、すべてやられていると思えば、はちよつと問題かもしれません。

生徒B そうしたら、ぼくはやはり外交官に、中央を変えるべきなのでしょうか。

岸井 今の話だと、外交官だともっと苦しむよ。つまり、外交官というのは相手あつてのことだから。相手の立場を理解しなければ、外交は成り立ちません。主張するだけではだめです。もっと言うと、外交交渉というのは足して二で割る感覚がないと、外交官はできません。もちろん時代状況にもよるけれども、戦争に勝っているときと、負けているときで、外交官の立場も全然違う。

しかし、今の感覚、考えて、外交官で何かを変え

たいと思うと苦しむと思います。まあ、それもいいですよ。苦しんで、そういうなかから、日本はどういう外交をやるべきか、自分はこので貢献できるということを学んでいくことはあるわけだから、それはそれでいいと思います。相当きついと思います。がんばってください。



塾高生の強み―品格と好奇心

生徒C（二年生） 岸井さんが今、ジャーナリストとして活躍するに至って、学生時代を振り返り、いちばんやっていて良かったこと、後悔したことを教えてください。

岸井 後悔していることはたくさんあります。大小いろいろあるでしょうけれども、塾高を出て、新聞記者に限らないと思いますが、一貫教育、塾生であること、とりわけ塾高生であったことのメリット、いちばんの強みは品格ですね。言葉が適切かどうかわからないけれども、いわゆる、いやしい生き方を絶対してはならないということです。

人間は弱いから、つい楽なほうとか、おとしめようとか、そういう気持ちがかわかないということはない。特にいろいろなことで競争や、ライバルがいれば、蹴落としてでも、という気持ちにならないとも限らないです。

しかし、大学で塾という風土、センスをずっとリードしてきているのは塾高生です。自然に身についてきているのですが、その基本は何かというところ、いやしいことには手を出さないという潔さではないで

すか。最後は人間力で、これがいちばん強い。何を身につける、何の技術を手にするにしても、最後の勝負はやはり人間力です。塾高生あるいは塾生はそういう点の強さがあります。

それを忘れてしまったら、この学校は何の意味もないという感じが私はしています。生き方の基本で、これはものすごくよかつたと思います。

生徒D（二年生） 岸井さん自身が社会に出て、塾高生であつてよかつたと思うことや活かされたことは何か、教えてください。

岸井 基本的には今お答えしたことです。ただ、これは時代とともに違ふと思います。私の場合は結果的にジャーナリストになりました。それは当時の世界情勢、日本情勢が、私の何かを知りたいという欲求の結果、その現場に行つて歴史の証人になりた。では、職業は新聞記者だ、それも外国に行つて特派員になることだと思つて入つたということです。

ところが、その夢は入つたらすぐ碎かれて、熊本に行つて公害問題に取り組むことになつてしまつたという巡り合わせがあります。その後、ワシントンも行きましたから、最後は念願がかなつたようなど

ころもあります。そういう状況があるのではないですか。

だから、自分がいちばんやりたいことは何かというのを常に自分に問いかけることと、そのためにアンテナを張っておくことです。もつと簡単に言うと、好奇心を絶対忘れてはいけない。ものに対する興味。「何だろうな、これ?」「何でこんなことになっているの?」、これは生涯貫く、一つの大事な要諦ではないですか。

好奇心を絶対失わずに、常にアンテナを高く広く張っておいて、チャンスや巡り合わせなどを逃さないようにする。皆、結果ですからね。後になって、「しまったな」と思っても遅いわけだから、そういうことだけは心掛けておくとずいぶん違ってくると思います。



報道の原則

生徒E (三年生)

相撲の八百長問題のスキヤンダル発覚の際に、メールを手に入れたからと言っていましたが、具体的にどうやって取材して手に入れたのでしょうか。マスコミ関係に興味があるので、具体的に教えていただければと思います。

岸井 私も詳細には聞いていませんが、つまり、どんな取材でも、まず人間関係をつくることです。その人間関係のつくりかたがライバル社と少し違う場合があります。同じ相手の場合もあるけれども、それぞれ同じ相手では同じ情報しか取れないわけだから、いろいろなことを考えます。

そうすると、あのときは何があつたかということ、暴力団との関係があつた。それが騒がれていた。名古屋場所でした。興行ですから、これは演劇の世界でも歌手の世界でも、最近だと島田紳助が大きな問題になってしまいました。どうしても暴力団や地下組織との関係が、そういったところにあり得るのです。

それで、どこの社も、大相撲と暴力団の関係を追いかけて、取材していました。そのうちに野球賭博と

いう話が出てきた。野球賭博をやる以上は胴元がいる。いないとそんなものはできないでしょうから、その胴元の取材をずっとやってきた。そうしたら、そこへ八百長のメールの話が飛び込んできました。

「じゃあ、それ、実物ある？」と聞いたたら、「ちよつと待ってください」と言って、手に入れた。それはやはり……、これ以上はあれですね(笑)。お相撲さんではありません。お相撲さんに事情聴取して証拠を取り上げた人です。その人からもらつた。

生徒E もう一ついいでしょうか。記者の名前を書いてある記事と書いていない記事がありますが、その違いは何ですか。

岸井 これも署名を全部入れるようにしたのは私です。ずいぶん昔ですが、若いころ、紙面改革に携わって改革委員をしていたので、生意気に主張しました。

一つは、新聞記事はいろいろな人が取材をして、総合的な判断で書かれます。ほとんどの記事は最低でも二人。一人だけでつくられている記事はほとんどないです。だから、署名を入れないのは基本的には当たり前でした。

大きい一面トップになるような記事は十人近くの記者が連日かかって取材してきたのを、全部集めて、

デスクやキャップが判断して、誰かにまともて書かせるわけです。だから、個人名はなかった。

しかし、だんだん、「その記事の責任はどうなるの？」ということになってきて、では、右代表で名前を入れましょうということから始まったのです。そうすると、個人で集めた記事、一人で書いた記事も、「入れたほうがいいんじゃないの?」「そのほうが透明性があるんじゃないの?」「責任の所在もはっきりするんじゃないの?」ということになって、その流れの中で、私の判断は全部入れるようにしたということなのです。

しかし、弊害もすごいです。今、苦しんでいる記者がたくさんいます。それは責任を伴うけれども、関係者にとっては自分の生命、利害関係にかかわるわけです。そうすると、徹底的にその記者をつけ狙います。「このやろう。あんなこと書かなきゃ、おれたちの生活、こんなにならなかつた」ということがあるわけです。

この迷惑度というのは半端でないときがあります。後悔しているとすれば、そこですが、だからといって、名前を入れないように戻すことはもうないと思います。ですから、リスクもあります。

生徒E

新聞をつくるときに心掛けていることは

何でしょうか。岸井さんの話を聞いていると、公害のためにキャンペーンをするなど、割と客観的というより、主観的に動いているような気がします。

岸井 そう見られてしまうと残念だけれども、戦後の日本のマスコミの基本として、公平、公正、客観報道を一つの原則として貫かなければいけないということがあります。しかし、これはテーマによって矛盾します。

やはり何かキャンペンで変えていきたいというのは客観とは言えないですね。意思が入るわけだから、それは主観ですよ。そのときは社としての統一的な主観ということになります。今、それを決めるのが私です。そういう立場ですが、しかし、それはあっていいと思います。提言であつたり、「これはけしからん」と徹底的にたたかとか、甘くする必要はないこともあると思います。

しかし、だからといって、徹底的に恣意的に意図的にやっつけていいかと言ったら、そうはいかないですね。それはおのずと制限があります。基本は、事実かどうかということを徹底的に裏表洗うことで、第一次情報だけでは絶対書かない。裏を取る。これを外したら、絶対だめです。つまり、事実でないことを書いたら、終わりです。信頼を失うわけです。こ

れが第一です。

それから、よく言われる建前と思われると困ってしまうけれども、もう一つは権力の監視というのがあります。必ず権力は都合の悪いことは隠します。今も原発のことです。いろいろなことがあります。それは政府だけではなく、東電だって、自分の都合の悪いことは当然、嫌ですよ。しかし、被害を受けるほうからすれば、「冗談じゃない。すべて出せ」となります。そのせめぎ合いが連日、今でもずっと続いているわけです。

その権力や力を持ったところの監視、場合によっては暴く。よくある政治家のスクランダルがそうですが、これはやらなければいけない。

三つ目は弱者。言葉はあまりよくないと最近言われますが、弱者には徹底的に寄り添ってサポートする。この立場は貫く。3・11の後、私が出した方針も、まず被災地、被災者に徹底的に寄り添う。これは本来のメディアの使命だと思っています。

だから、権力の監視、それから実力ある政治家であつたり、経済界だつたりいろいろあるけれども、その監視と、弱い立場の人たちを徹底的にサポートする。

もう一つは検証でしょうね。

そして、五つ目は自己点検、これは欠かせない。そのために、どこの社も第三者委員会を入れていますが。これも毎日新聞が最初につくったのですが、第三者に常に紙面を審査、チェックしてもらおう委員会です。今、有名な池上彰さんが審査委員の一人です。彼は毎日新聞の小学生新聞で育つたため好意的で、私が理事長をしている日本ニュース時事検定能力協会の理事もやっています。そういう自己点検も欠かせません。報道にあたっての原則と言えるのはだいたいその五つかな。

生徒E では、マスコミを監視しているのは、その第三の組織だけですか。

岸井 いや、やはり視聴者であり、読者です。これは日々来ます。

難しいです。明後日もまた私がレギュラーで出演する番組がありますが、とりわけデリケートな政治で、一川防衛大臣あるいは山岡国家公安委員長の辞任問題があります。問責がきょう通っていると思います。そうすると、必ずコメントを求められますが、私は「何やっているんだ。ふざけるな。直ちに辞表書け」と言いますと、必ずすごい抗議がダーツときます。おそらく番組中から来るんじゃないか。

そういうかたちで、いろいろなやりとりがあります。

す。それは一つの例ですが、どんなコメントに対しても、必ず賛否、いろいろな声があります。それは完全に外からチェックされ、監視されているという感じですか。自由にはなかなかならない。



誰でも坂本龍馬になれる時代

生徒 F (三年生) 先ほど安保闘争の話が出ましたが、あの当時はそれこそ安保闘争のように国内を二分するような問題が発生した場合には、国民は声を上げて行動していたと思います。しかし、近年の年金問題や郵政民営化、最近であれば、TPPの問題でも、国民が声を上げて怒りを見せるようなことは少なくなっただと思います。

それは情報があまり広まっていないからといわれることが多いのですが、政府が情報を以前より出さなくなっただけなのでしょうか。それとも国民があまり情報を求めようとしなくなっただけなのでしょうか。

岸井 これも判断が難しいですが、あえて申し上げれば、後のほうだと思います。昔と比べたら、情報開示なんていうものではないです。情報、秘密を守るのは大変です。そのくらいの時代になりました。最近もオフレコ問題でもめましたが、オフレコなど基本的に今の時代は成り立たないです。そんなことを約束するほうが間違っています。

それから、最近、学生がおとなしいと言われます。

「ウォールストリートを占拠せよ」運動もヨーロッパのデモも「アラブの春」も若い人たち、とりわけ学生がデモに参加して国が変わっていくというのがあります。やはり若い人の感性のほうがそういう意味でものすごく敏感です。「国はどうなるのか?」「この独裁を許せない」「このままだらうなるのか?」「このか?」「自分たちが戦争に駆り出されるのか?」、そういうことでしょうね。

先ほどの啄木は二十一歳です。感性、詩人ということもあるだろうけれども、そういう点で国が大きく変わるときの一つのバロメーターです。そこに少しイデオロギーが入ってくるとだんだん政治運動になりますから、そうするとイデオロギー的な政治団体にあらわれる場合もあります。

日本の場合、安保闘争のときは本気になって、賛否、国論が二分されたわけです。とりわけ若い人たちが皆、デモに行った。「この内閣は許せない」「岸、辞めろ」とシュプレヒコールをやって、事実、総理大臣が辞めるわけです。

そういうことが今、なぜないのか。一つは、あと十年後そんなことはあり得ないと思いますが、やはり豊かさだと思えます。いろいろな不満はあるけれども、何だかんだいって食っていきけるわけです。明

日食えなくなるかどうかという危機感を持ったときに、こういう運動が爆発するのです。でも、今からです。食っていけるかどうかわからない。今までは、二十年失われたとは言うけれども、高度成長、安定成長がありました。

最近、私のところに、いろいろな世界各国からメディアやシンクタンクが来て、毎日のように取材される側になっています。「日本は何を、考えているの?」「どうするの?」と、逆に取材されています。今、良くも悪くも、日本が注目されています。日本はどうしようとしているのか。ここそのままの政治経済でいくのか。

「まさかそんなことはないだろう。もう十年も二十年も経って」と。ちょうどあなた方が育った世代ですね。この二十年、日本は本当に異常です。異常な中であなた方は育ってきているから、それを総括して、どう考えるかということがものすごく重要です。

そのなかの一つはやはり豊かさだと思います。明日食えなくなるという飢餓感、絶望感がない。それは、なかなか若者をデモには駆り立てないのです。

それから、独裁者がいなかった。そうではないかなと思います。少し短絡しすぎているかもしれない

ん。

これからは大変です。来年以降、いろいろな意味で日本は本当に大変だと思います。しかし、私は今、樂觀しています。ものすごくいいきっかけ。これだけ落ち込んで、そして3・11が襲ってきた。そうでしょう? 復興ということは将来の日本の全く新しい国土づくりです。私が言い続けてきた国づくり。全く新しい国づくりが始まる。あなた方はそこに参加できるのです。

そういう世代。だから、新しい新聞記者に私はいつも言っているのは、「誰でも今、坂本龍馬になれる時代になったのだから、とにかく自分がやりたいことを、あと十年後どうなっているのかを考えながら、行動しなさい」と。それは必ず成就する。そういう時代になってくる。

それは、逆にあなた方が失われた二十年に育った特権です。これを変えなければいけない。どうやって新しい国をつくるか。

原発の事故もそうでしょうか? 新しいエネルギーをどうするか。どんなエネルギーにするにしても、一から全部、これから始まるのです。

場合によっては、日本はずっと資源がない、エネルギーがない、外国に頼らざるを得ないと言われて

いたけれども、もし自然エネルギーや再生可能エネルギー、バイオエネルギー、あるいは地熱まで全部、総動員したら、こんなすごいエネルギーを持った国はないよね。あなた方の世代はそういう発想の転換ができるわけです。

我々の世代はもう遅い。今までどおり延長で暮らしていくしかないけれども、あなた方の世代、自分たちの時代をどうするか。ものすごいいいチャンスです。そういう感じがします。

だから、うらやましい。これは田原総一郎も皆、言います。私もたまたま早稲田で教えていたものだから、学生にそう言うと、皆、きよんととして、「何がうらやましいんですか？」と言われます。しかし、我々の世代から見たら、あなた方は本当にうらやましい。やろうと思ったら、何でもやれる。まさに坂本龍馬に誰でもなれる時代です。

それはあくまでも新しい国づくり。新しいエネルギーを興す、新しい文化をどうやってつくっていくか。それは、説得力があつて、皆に共感を覚えさせるような行動が取れば、あつという間に支持は集まります。

昔はそんな手段がありませんでした。この間、ある買収された森を買い戻すのに、環境団体の一つが

ネットで呼びかけたら、半年で五億集まりました。今までは、そんなことは想像もできない。それで半分買い戻し。全部ではないけれども、今までは考えられないことがそうやって実現するのです。



新聞の読み方―自分の座標軸を作る

生徒G（二年生） よく新聞を読んでいるときに、父親が「表面的に記事を読むのではなく、もっと深く読んで、横の事件とのつながりを考えながら読め」と言います。自分にはまだ、どう読むかというのがよくわからないので、こういうふうに関心すると、もっと自分に力がつくとか、そういう読み方があったら教えていただきたいと思います。

岸井 おやじさんは非常にいいことを言っているけれども、あなたが戸惑っているように、難しいね。しかし、ある程度、簡略に申し上げれば、先ほどから言っていることの延長線上ですが、「本当なのか？」「何でこうなっているのか？」と、いちいち疑問を持つ。スーッと読むのではなく、見出しをそのまま受け取るのではなく、「本当？ 何でこんなことが起きちゃったのかな？」ということですよ。

何事にもバックグラウンドがあるわけです。それから、歴史の流れがあります。このごろ、ナイフ男があちこちで切りつけたりしているけれども、これも何十年も前はなかった。しかし、酒鬼薔薇事件以来、あるいは「殺す相手は誰でもよかった」とか、

全然違う犯罪が起きてくる、この歴史的、あるいは社会的、経済的な背景は何か。なぜそうなのか。あるいはその個人的な病気などもある。では、その病気はどういうところから引き起こされるようになってきたのか。

そうすると、いろいろな座標軸がつけられるのです。決定的ではないけれども、いろいろなヒントが得られる。ジャーナリストはそういう座標軸をいつもそれぞれが持つわけです。私はずっとこの五十年間、座標軸ばかりつくってきました。特に私は歴史、考古学が大好きだったから、私の場合は歴史で見ようとします。

それぞれの立場、それぞれの仕事でおそらく座標軸はいくつかあります。「これはこういう背景、こういう流れの中にあるのだ」、「一過性ではない」あるいは「一過性で終わるな」ということが、そういう座標軸を持つっていると割と判断しやすいです。

それは一般的に誰でも通用するというものではないです。それぞれの個性や、仕事だったら仕事、持ち場によって、皆、違ってきます。

大きく言えば、縦軸は歴史、横軸は関係性です。その原点は個人でしょう。そうすると家族があつて、ずっといくわけです。サルと人間ではないけれども、

生物学的にいうと、歴史はずっと上までビッグバンまでいくわけです。

今度は、関係性。これも個人と家族から始まる。そして、ご近所、親戚があつてと、ずっといくわけです。

国家で言えば、外交があるわけです。もつと言えば、これもサルと人間ではないけれども、生態系という関係、これも宇宙になります。

だから、縦横ともに個人から宇宙、その中にいろいろな切り方があります。十年前でもいい。たとえば私が今、社内で、「科学的根拠があるわけではないけれども、一つのヒントだよ」と記者に言っているのは、先ほど少し触れましたが、近代一五〇年で今、三度目の大きな転換期です。一回目は幕末維新です。二回目は戦後の敗戦、復興です。

そうすると面白い座標軸があります。干支というのがあります。今年が卯年。六十年前の卯年は何があったか。一二〇年前の卯年は何があったか。日本の近代、二回とも大きく変わった年。別に干支が歴史をつくるわけではないですが、勉強していると、いろいろなヒントがあります。

一二〇年前の卯年に何があったかという、憲法が前々年にできて、前年に初めての選挙が行われ、

初めて国会が開かれた。そして、もつと大事なことは日清戦争が始まります。つまり『坂の上の雲』が始まる。この間、二十年間で朝鮮半島併合、台湾植民地化、沖縄を正式に取ったという、大国になっていく二十年間です。

今年、中国の革命百年です。日清戦争の結果で、中国で革命も起きている。

それが、ちょうど一二〇年前、国会が開設されて、日清戦争が始まった年です。世界から見れば、それまで全然知らなかったたちよんまげを結っている封建社会の武士の社会があつという間に、気がついたら、「何？ 国会までつくっちゃった？」「戦争で大清国、大ロシア帝国に勝っちゃった？ 何が起きたんだ、アジアに？」というときです。

戦後はちょうど六十年前、当時の吉田茂総理が日米安保条約とサンフランシスコ講和条約に調印した年です。その前年からいろいろなことがあつた。保守合同があり、革新統一が行われ、今の自民党のルーツ、民主自由党ができた。これが六十年前です。そして、日米同盟関係を結んだ。これはそのときの吉田さんの日本の選択だったわけです。自由主義と民主主義と市場経済、これを三本柱とする国家にした。いと彼は思ったのです。その結果の選択をしました。

面白いでしょうか？ ちょうど六十年前と一二〇年前、そうすると今度は何だろうなと思うのではないですか。六十年経って、今は何が起きているのかな。

国の大きな進路を選択しようとしているわけですから。六十年前と一二〇年前と同じように。今は外圧がないから、もっと厳しいかもしれない。おそらくヨーロッパの変調が外圧になって、ダーンと襲ってくるのではないのでしょうか。そこで初めて日本人もいろいろな意味で気がついて、「これは大変だ。がんばらなきゃ」と、来年以降、なると思いますね。どうでしょうか。おやじさんと相談してみてください。

生徒 G ありがとうございます。

岸井 ヒントは座標軸、どんな身近なところでもつくれます。人間関係でいいですから。

司会 岸井様、ありがとうございます。(拍手)
最後に校長先生より、お言葉をいただきます。

大谷 先ほど岸井さんからお話が出た『サルと人と森』という本を皆さんにプレゼントします。これ

は同窓会からの贈り物です。熟読して味わってください。(拍手)

最後になりましたが、こんなに緊張した、盛り上がった塾高生を久しぶりに見ました。本日はお忙しいなか、塾高生のために時間を割いてくださり、ありがとうございます。(拍手)



■ 2011 年度 将来展望講座（第 1 回） 実施記録

実施日時：2011 年 12 月 9 日（金）15 時 15 分～17 時 15 分

会場： 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1 階 シンポジウムスペース

講師： 岸井 成格 氏（毎日新聞社 主筆）

テーマ： 「『^{すこ}凄^い時代』を生きる塾高生たちへ

好奇心忘れずに アンテナを高く！」

主催： 慶應義塾高等学校、慶應義塾高等学校同窓会

参加人数：約 140 名

2011 年度慶應義塾高等学校将来展望講座

2012 年 3 月 24 日発行

発行・編集 慶應義塾高等学校
〒 223-8524 横浜市港北区日吉 4-1-2
TEL 045-566-1381
URL <http://www.hs.keio.ac.jp/>
制作 株式会社 アラレス

©2012 Keio Senior High School, Printed in Japan.

無断複製・転載を禁ず